# 友よさらば

七里彰人

寒い朝だった。三月も終わりに近いのに、暖かい日が三日続いた後また急に寒くなった。

その日、私は取引先への最後の挨拶回りへ出かける前だった。定年退職を迎えて感傷的になっていたところへ、連絡が入った。

「部長、本社から電話です。工場長のことだそうです」

「工場長からかい」

「いいえ、総務課長からです」

なんだろう、工場長のことで総務課から電話とは。工場長は私と同じ歳で同じ月の生まれで、今日が私と同じ定年退職の日である。

「おはようございます、部長。今日で退職ですね、おめでとうございます」

「ありがとう。お世話になりました」

社長からではないのが少し不満だったが、どうせ夕方には名古屋の本社と工場へ挨拶に向かうつもりだからと思い直していると、電話の向こうの声が暗くて低い声に変わった。

「部長、今から言うことを落ち着いて聞いて下さい。実は」

と言ってから咳払いが聞こえた。

「昨夜、工場長が亡くなりました。今朝奥様から連絡がありまして、今夜がお通夜で明日自宅で葬儀が行われるそうです。詳しいことはファックスでお知らせします」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、嘘だろう？　先週会議で会ったばかりじゃあないか。四月バカまではまだ二日あるぞ。悪い冗談は止めてくれ」

「いいえ、本当です。残念ですが」

私と同時に退職する筈なのに、昨夜死んだというのだ。三日ほど前の夜、電話で話をしたばかりだった。総務課長の話では脳卒中だそうだ。信じられない。

信じられないまま、とるものも取り敢えず東京を出て、工場のある名古屋の彼の自宅へ急いだ。

彼とは三十年以上もの間、戦友ともいえる仲だった。休養と自分たちに対する褒美

として、退職後二人で一生に一度になるかも知れない海外旅行をするという約束だったではないか。二ヶ月後出発する予定のツアーをどうしたらいいのだ。

通夜の客もまばらになった遅い時間に着いた。聞いて見ると最後の出勤の日、倒れたという。玄関の敷居に寄り掛かるように倒れていたのを朝早くパートに出かけた奥さんが帰宅して発見したそうだ。もはや七時間が過ぎていて手遅れだった。

「過労死だ」

私は当然のように思った。三十数年の間、小さな食品工場の重労働に明け暮れた職人が、最後の六年は工場長として責任を持たされた挙句、腰を痛めてぼろぼろになって辞めていく。決して他人には見せない腰に巻いたコルセットをこっそり見せてくれたことがある。痛々しいものだった。

今日やっと解放されて人間らしい人並みの休養が待っていたのに、年金を一度も受け取ることも無く逝ってしまった。

通夜の畳に正座した小柄で地味な奥さんがますます小さく見えた。生花に囲まれて元気に微笑んでいる遺影が痛ましい。これからどうするのだろう。年金は半分になる。長屋のような社宅だったが出ていくことになる。大企業の十分の一にも満たない退職金は、引っ越しと入居のための費用で大部分が飛んでしまうだろう。どうやって生活していくのだろう。だが通夜の席で会話した二人の息子の成長した姿の中に逞しい父親の面影を見て少し安心した。

最終の新幹線で東京へ戻った。座席に座って感慨に浸った。二人とも前職の会社が倒産して、職安からこの同族会社へ入社した外様ともいうべき彼と私は、お互いに支え合い一兵卒から会社に貢献してきた。最後は工場長と営業部長として仕事をやりぬいた満足感があった。

新幹線がトンネルに入ると、車窓に自分の顔が映っている。その隣に彼の横顔が映っているような錯覚を覚えた。二人で飲んだ居酒屋の光景を思い出していた。彼は無骨というのか無口で、長躯やせ形のわりに腕力は強かった。重労働のため異様に曲がった太い指で、冷酒をコップの上にから掴み、するように飲んでいた彼。飲み始めるとツマミも料理も食べず冷酒だけを飲んでいた。

「何か食べないと体に悪いよ」

私は半分諦めながらいつも同じことを言った。工場への要望や新製品の開発やその

販売方法の打合せの後は、酔うにつれてオーナーに対する愚痴になった。研究室に人が欲しいとか、工場を機械化しない限りまるで地獄のような現場では辞めていく新人を引き留めることもできない等というものだった。それでも俺はこの仕事が気に入っているんだと彼は左手で顎を撫でながら右手で酒のコップを持ち、満足そうに話したものだ。確かに休みも取らず日曜出勤もいとわない私たち二人にとって、仕事が嫌いなはずはなかった。後は家族のことや退職後の話になった。酔いが回ると話は決まって好きな古代ローマ帝国の遺跡を見に行く話になった。彼の愛読書は塩野七生の「ローマ人の物語」で、とにかく歴史に詳しかった。この話になると彼はまるで下町の哲学者という風情だった。時々横顔にインテリ風な面影を見せる時があった。平凡な私と違って彼こそ余生を有意義に過ごすに相応しい長老になる存在だった。

会社にとっても世間にとっても重要な人物を殺したのは誰だ。小企業の貧しさか、それともそれを取り巻く業界の因習か、あるいはそれに甘んじた彼の東北人らしい、言わば忍従の精神だったのか。

君は我慢せず、もっと怒るべきだった。大いに怒る資格を持っていた。しかし、それが出来なかったのは、生まれ育った環境が作った優しい忍耐する性格が君を押しとどめたのだ。私が営業マンの資質を持ちながら彼の代弁が出来なかったのが、本当に悔やまれる。

列車がトンネルを抜けると窓に映っていた彼の影は消えた。彼は死んだのだ。いまさら何をしても彼が生き返るものではない。しかし、私は何かを背中に背負った気がした。

ローマやポンペイへ行くツアーはキャンセルしないことにした。私は彼のためにも行かなければと思い始めた。一人で二人分の旅行をしてこよう。そして帰ったら「行って来たよ」と旅の話を霊前に座って君と語ろう。私は君と伴に旅をする決心をした。